

## 魯庵による『罪と罰』初訳と新訳の比較

西野, 常夫  
九州大学

<https://doi.org/10.15017/16067>

---

出版情報 : *Comparatio*. 12, pp.67-79, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 魯庵による『罪と罰』初訳と新訳の比較

西野常夫

明治の小説家が苦心しながら口語文で小説を書き始め、日本の近代文学が本格的に幕開けしてまもなくの頃、内田魯庵（不知庵主人）がドストエフスキイ『罪と罰』（原作一八六六年）の、前半だけであるが、榮譽ある最初の邦訳者になつてゐる（ただし、英訳からの重訳。原作は全六編およびエピソードから成るが、魯庵の訳したのは第三編までで、頁数でほぼ半分に相当。この前半をさらに『卷之一』明治二五年一月、『卷之二』明治二六年二月の二巻に分けて、いずれも内田老鶴圃から刊行）。尾崎紅葉からこの小説のことを聞いて丸善で購入した本を読み始めるや、「力ある大きな手で精神の全体を掻きまはされるやうな」衝撃を受けた、という回想文を残している（注<sup>1</sup>）。魯庵の言葉は、この小説を読んだ多くの読者の感想を代弁しているが、魯庵のこの小説に対する思い入れを如実に表わしているのは、二一年後の大正二年七月に同じ前半部の全面的改訳を出版していることだ（丸善から出版）。魯庵以来、『罪と罰』の邦訳者は一三人出ており（重訳、共訳を含む）、改版などの過程で一定の改訳を施した者はいるが、魯庵ほど全面的に改変した新訳を世に問うた者は他にいない。本稿では、魯庵のこの新訳への改変について考えてみたい。

### 一、改訳への意欲と底本について

『罪と罰』の新訳及び旧訳出版時代の回想（『文章世界』明治四四年一月）において、魯庵はまず初訳の出版について、『罪と罰』のやうな高級読者にさへ難しいものを正直に翻訳して公けにしたのは無鉄砲」と回想し、「自分の力量の程も顧みないで向こう見ずに訳したので、当時の具現者は内々笑つてゐたかも知れぬが、自分では一生懸命、真剣勝負だつた。が、力量手腕が無いのは拗ろない、首尾よく失敗したやうなことで、『解らない、解らない』とばかり云はれた」と、初訳の文章の難解さを訴える声のあつたことを認めてゐる。そして、「尤も其時分は、元来原本が決して解りいゝものでなく、七くどくて厄介なもので、達者に原本を読む力のある人でも矢張解らないのが十中八九だから、解らないと云はれても格別不思議にも思はなかつた」のだが、「今考へると原本が解らないものにせよ、解らない原本を愈々解らなくしたのは自分の罪であつた（中略）其時分は夫ほど拙いとも思はなかつたが、今読むと背中冷汗が出る。そこで、こんな拙い翻訳では世間に紹介するに足りないし、第一には原著者に対しても甚だ相済まぬと、気が付いたのが、再び新たに翻訳し直す動機になつて、四五年前からポツ／＼着手したので」と、改訳に着手するに至つた経緯を振り返つてゐる（注<sup>2</sup>）。

魯庵が使用した底本は、初訳についてはその「例言」に「余は魯文を解せざるを以て千八百八十六年板の英訳本（ヴキゼツテリイ社印行）により之を重訳す」（注<sup>3</sup>）とあり、また新訳本についてはその「はしがき」に「此翻訳の底本としたのはヴキゼツテリ

一の英訳本である」(注4)とあるので、いずれも、Frederick Whishaw による訳本 *Crime and Punishment ; a Russian Realistic Novel* London: Vizetelly, 1886 であること確認すべき。

本稿で引用する「罪と罰」の出典は次の通りで、引用の際は当該本の記号と頁数を(A、一〇)のように括弧内に示す。

A. 魯庵訳『罪と罰』(初訳)については、『内田魯庵全集』第一二巻、ゆまに書房、昭和五九年四月、から引用する。ただし、初出の『罪と罰 卷之一』(内田老鶴圃、明治二五年一月)および『卷之二』(内田老鶴圃、明治二六年二月)と照合し、一部の表記について初出に従った箇所がある。ルビは適宜省略した。また初訳に対する書評についても、それが再録されている同全集第一二巻から引用する。

B. 魯庵訳『罪と罰』(新訳)については、『罪と罰』(丸善、大正二年七月)。

C. Whishaw による英訳としては、*Crime and Punishment, translated by Frederick Whishaw, Chicago : Laird & Lee, Publishers* (出版年無記載)。新谷敬三郎、柳富子、井桁貞義の共著「ドストエフスキイ翻訳年表・独仏英米日：1881〜1945」(注5)によると、一八八六年に「罪と罰」の Whishaw による英訳本として、Vizetelly 版のほかに、New York の T. Y. Crowell 版、右記の Chicago の Laird & Lee, Publishers 版の三種が出ているが、いずれも全四五六頁とあるので、三種とも同内容であると推定できる。本稿で参照できた本は早稲田大学中央図書館所蔵の三番目系統のもので、出版年、版数の記載はないが、やはり全四五

六頁であり、魯庵が使用した本と同内容である可能性が高い。

D. *Crime and Punishment, translated by Constance Garnett, London : William Heineman, 1914.* Whishaw 訳の次に出た英訳であるが、出版は魯庵の新訳の翌年である。何か運命のいたずらを感じさせるが、わずか一年違いで、魯庵は改訳時にこの本を参照することはできなかったわけである。

E. H. Moser 訳 *Schuld und Sühne*, Leipzig : Ph. Reclams, 1888. 後述の高橋五郎の書評で使われている。

F. ロシア語原文は、Ф. М. Достоевский, *Преступление и наказание* в Пол. соб. соч., том 6, Ленинград : Наука, 1973

F.

二、初訳に対する書評と新訳

初訳の『卷之一』が出版されると、大変な反響を呼び、短期間に多くの書評が書かれ、その一部は三か月後に出版された『卷之二』の巻末に掲載されることになった。これらの書評には北村透谷「罪と罰」(内田不知庵訳)、「女学雑誌」明治二五年二月七日)のように小説の内容面を論じる通常の書評の形をとるものもあったが、魯庵の訳文に注目し、称賛したり疑問を呈することに重点を置くものもあり、さらにまたそうした疑問に対して即座に弁護を買って出るといった書評も現れた。つまり、この時の読者は魯庵の訳し方に非常な興味を示し、不満な箇所には細かい注文をつけたりしたのだった。そこで、本稿で行なう初訳と新訳の比較の方針としては、初訳の訳し方に対するこうした各種批判に

配慮した何らかの対応が新訳においてなされたのかという点をま  
ず見ていきたい。

細かい指摘といえ、高橋五郎の書評（『国民之友』一七三号、  
明治二五年一月三日）が筆頭にあげられる。高橋の書評は魯庵  
の訳し方に関する後続の書評を誘発し、翻訳論議の突破口を開く  
ものとなった。高橋は英仏独その他の外国語をよくした英学者・  
評論家で、新約聖書（明治一三年）、旧約聖書（明治二〇年）の和  
訳に参加し、またJ. C. ヘボンの『和英英和語林集成』第三版  
改正増補（明治一九年）、その他の明治中期の英語辞書の編纂に貢  
献した人である。高橋が秘書となり薫陶を受けたS. R. ブラウ  
ンは用語や文法に非常に厳格であつたと伝えられている（注6）。

高橋の書評は、「此の如き微瑕は固よりその他の諸点にては間  
然すべき所なきの好翻訳を傷くるに足らず」と締めくくられてお  
り、全体としては魯庵の初訳を一边倒に批判する意図で書かれた  
ものではない。しかし本稿では、高橋の言う「微瑕」に注目して  
みたい。

高橋は魯庵の初訳を検討する方法について、「西文を以て西文を  
訳せる者に較べ見ん」、つまり西洋語訳（高橋は上記の Moser に  
よるドイツ語訳を用いている）と、英訳から訳した魯庵訳を比べ  
てみる、と断っている。それは、「此の翻訳のみを見たらんには決  
して斯る欠点は見あたらざらん、却つて皆是金玉の文字と思はん」  
からである。これは一見もつともな理屈のように見えるが、後述  
の十八公史（松居松翁）の指摘にあるように、Moser 訳にも誤訳  
の可能性が排除できない以上、この方法は完全なものとは言えな

かつた。ともあれ、ここで高橋は、外国語の能力を活用した啓蒙  
的な批評の立場を打ち出してしているわけである。

さて高橋は、『卷之一』全体ではなく、冒頭から三段落目の途中  
までを例にとつて疑問点を列挙する。一部分を見て全貌を推すこ  
とができると考へてのことであろう。少し長いがその部分の初訳  
と新訳を併記しておく。

（初訳）七月上旬或る蒸暑き晩方の事。S……「ペレウーロク」  
（横町）の五階造りの家の、道具附の小坐敷から一少年が突進し  
て、狐疑逡巡の体でK……橋の方へのツそり出掛けた。

首尾よく階子の下口で主婦に出会はなかつたが、此家の主婦は下  
坐敷に住つて、台所が常々戸の開いたま、階子に對て居るので、  
いつでも少年が出掛ける時は余義なく敵の竈前を通り過ぎ、骨  
身に染みるほどの恐怖を生じ、意気地なく眉に皺を寄せるが常で  
ある、といふは宿料の停滞があるから、それで顔を合はせるのが  
怖ろしいのだ。

斯くばかり少年に畏気が附いたは不幸が重つた故でなく、此頃  
中依剥昆垚里垂に均しき神經的沈鬱症に罹つたからだ。全く社会  
から隔絶れ、一室に籠つて、単り此家の主婦のみならず、誰と顔  
を合せるも嫌で、たまらぬ。一度ハ貧に逼られた事もあつたが、  
今でハ此一点に感覺を失くして日々の業務を悉く抛擲してし  
まつた。（A、九〇—一〇）

（新訳）七月の初め、或る蒸し／＼する晩方、S……横町の、只あ  
る大きな五階家の、小さな道具附きの貸間を飄然と飛出した青年  
があつた。途方に暮れた物案じ顔をしてK……橋の方へブラリと

曲つた。

運良く青年は階段の途中で下宿の主婦おかみに出会はずなかつた。主婦は青年の借りている部屋の一階下を住居すまゐにして、庖厨かっつての扉ドヤを始終開放あけはなしたなりに、階段から直ぐ入れるようにして置くから、何時でも青年が外で出ける時は、忌いやでも応こたでも此の強敵かうてきの竈前かまどを通らねばならないので、其度毎そのたんびに何とも云はれない不愉快な気持がして、面目めんぼくなくて我知らず顔を顰しりぞめた。といふのは、宿料の停滞たいどがあるから顔を合はせるのを恐れてゐたのだ。

尤も夫れほどに萎いじけて意氣いき地ぢが無くなつて了つたのは、強あながち轆轤りくろ不遇ふぐな為ばかりでなく、近頃依剝ヒゴ昆垚コング里亜リヤに等しい鬱ふさぎの蟲むしに取憑とかれたからで、社会せけんから遠とほざかつて一と間に閉籠ひろうつたぎり、此家の主婦うぢばかりぢやない、人間といふ人間の顔を尽く見まいとしてゐた。尤も一時は貧乏を苦にした事もあつたが、近頃は其様そのような事には無神経むしんけいになつて、毎日の仕事といふ仕事を尽く放擲はならかして了つた。(B、一〇二)

高橋はまずこの冒頭第二文について、次のように述べている。

先づペレウーロクペレウーロクてふ魯語は何のために入れたるや、何故に直ちに「横町」とは書かざりしや、且又……は果して何の用ぞ、「ナニガシ」と言はば無用ならや、独逸文にては単に Sischen (Moser 訳原文では Sischen——西野) Seitengaess chens と書けり、且又「横町」のみにては未だ尽くさず、是に此れは陋巷を謂へるなれば独逸文にて殊に chen を横町の語尾に加えたり、此の如き点も亦精細に區別せざんばあるべからず(中略)「五階造りの家の道

具附の小坐敷」とは何なるものか余輩は領會する能はず、独逸訳にては毫も是の如き文字を此に載せず(比較的に評すとは言ひながら原文と対照するも亦一興なれども余は原書を我が書齋しやうさいに有せず、残念千万)、「突進して」も次々の文字にふさはしからず、「逡巡」、……及び「のツそり」俱に妥ならず(A、三四九)。

新訳の方ではこの部分はかなり改変されている。両者を比べてみると、新訳では「S」と「K」の読み仮名「なにがし」、および「ペレウーロク」の語は消え、主人公の部屋は「貸間」となり、主人公の行動の様態を表す動詞と副詞が改変され、一見して、高橋のいちいちの指摘を踏まえて改良しているようにうかがえる。「ペレウーロク」は「横町」のロシア語であり、ロシア語の読める二葉亭四迷の助言を得ながら初訳に取り組んだ魯庵が読者のために良かれと思つて追記したのであるが、確かに高橋の指摘するように、すでに「横町」とはつきり訳出されているのであれば、ロシア語の追記は無用の混乱を招きかねないため不要であつたかもしれない。Whishaw 訳が「In the Pereulok S——」(C、五)というぐあいに、舞台であるロシアの雰圍氣、臨場感の醸成の効果をねらつてであろうか、ロシア語の音訳を使つており、初訳時の魯庵にも同様の意図があつたと考えられる。ただし Whishaw 訳の方は「横町」に相当する英語を付記していないので、英訳読者の方こそ、この部分は理解できなかった可能性が高い。ちなみに Garnett 訳では、単に「in S. Place」(D、一)というぐあいに英語だけで済ませている。

細かいことだが、高橋が次に削除を求めている「S……」の「……」については、新訳でも温存されている。これは魯庵の方であえて削除の必要を認めなかったのだろう。実際日本の小説では「某……」といった書き方は時々目にするものであり、とくに違和感はない。高橋が使用したドイツ語訳が「……」を使っていないとはいえず、一字一句忽せにしない聖書翻訳者である高橋の神経質すぎる要求であると言えよう。

厳密な高橋はさらにドイツ語訳の「Seitengasschens」のように、「横町」(Seitengasse)に「chen」(「小」の意を表す後綴)の意味を加えることを求めているが、主人公の住む集合住宅のある横町がそれほど狭いと判断あるいは強調する根拠はないので、「横町」で十分であろう。ロシア語原文のこの部分は単に「<sup>B</sup> C — m nepeyuke」(C横町において)(F、五)である。高橋の次の指摘に移ろう。二段落目の前半部について高橋は次のように述べている。

「下坐敷」にては明らかならず、モーゼル(独逸訳者)は line (Moser の原文では eine——西野) Treppe tiefer in einem anderen Lapis (Moser の原文では Logis——西野)と書けり、且彼は初めに五階造云々の事をいはず、此にて先づ「彼が部屋は或る五階家の直ぐ屋根したに在て、実は居室といはんよりは墓といふが近かつた」としるせり、「竈前を通り過ぎ」といふも紛らはし、実は決して竈の前を過ぐるに非ず、只階子を下るときに彼処より見ゆるの義なり、(A、三四九〜三五〇)

初訳と新訳を比べてみると、「下坐敷」は改善されている。次の問題点、すなわち「彼は初めに五階造云々の事はいはず」と高橋が述べているのは、主人公の住む集団住宅が五階建てであることは、冒頭第一段落ではなく、「此にて」つまり第二段落になって初めて示されるはずだということである。この指摘はもっともであり、「五階家」はロシア語原文、Moser 訳、Garnett 訳のいずれもが第二段落で示しているのに対し、なぜか魯庵の使った Wishaw 訳だけが、先回りして冒頭第一文で示している。魯庵は Wishaw 訳に従ったまでであろうが、この箇所については二葉亭の助力によるロシア語原文との細かい照合作業はなされなかったようだ。また新訳でも改変されていない。底本として依拠するのが同じ Wishaw 訳である限り、短い語句レベルの訳語の改変はできても、文の順序まで高橋の指摘だけを頼りにして変更することはできなかつた、ということであろうか。このようにロシア語原文との照合の痕跡が見られない箇所は少なくないが、続いて高橋が補足している主人公の部屋の描写「実は居室といはんよりは墓といふが近かつた」の欠落もその一例である。この箇所は主人公の住環境が少なからず精神状態に影響していることを示唆する重要な一節であるだけに、欠落は惜しまれる。ただし、Moser 訳の「墓」(Grub) (E、三)は、後で主人公の母親がこの部屋を訪れた時に口にする象徴的表現をそのまま先取りしたものであるが、語り手の口から冒頭のこの時点でするように規定してしまうのは作家の意図とずれるようであり、訳し過ぎと言ふべきであろう。ロシア語原文では「押し入れ」(shrad) (F、五)に過ぎない。こ

の部分は、Whishaw 訳では欠落しており、新訳でも補足されていない。

実は新訳本の「はしがき」に、先に引用した、「原著者に対しては甚だ相済まぬと、気が付いたのが、再び新たに翻訳し直す動機になつて」新訳を出したと述べている『罪と罰』の新訳及び旧訳出版時代の回想」とはやや矛盾するような次のような記述が見える。「幸ひに旧訳当時故二葉亭四迷氏に由て原本と対比較勘した書入本及びノートの残存するものを基礎として若干補修した個処がある。夫故に英訳に由つたのであるが、必ずしも一々英訳通りでは無い。同時に露の原文と若干相違してゐるのが比較校勘の際明白に解つてゐても矢張英訳に準拠した個処がある。例えば前訳出版当時二三の評家が原本又は独訳と照らして誤訳と指摘した数個所の如きは堅く信ずる処があつて誤訳と思はぬから依然英訳に随つて少しも更めなかつた」(A、三九〇)。二葉亭は新訳時にすでに故人となつていたため、もはやロシア語について直接教えを請うことはかなわなかつたものの、初訳時に活用した二葉亭のノート類が残つていたので、それを改訳作業に供した、と説明しているのはいいのだが、理解に苦しむのは「露の原文と若干相違してゐる」でも、「堅く信ずる処があつて」、厳密でないと魯庵自身が認める Whishaw 訳にあえて依拠した、と述べている点である。また「はしがき」の続く箇所で「余の訳書から推して原作を想像すると大いなる間違ひで、余の役目は唯筋書き通弁をしたぐらゐに過ぎん」と訳文に対してかなり控えめな言い方をしているところなども、上記の「回想」と趣旨がずれているように思われる。こ

のように新訳に対する魯庵自身の考え方には微妙な動揺が見られるのであるが、いざれにせよ、新訳は旧訳の不備を可能な限り是正するために着手されたものなのだ、と考へて間違ひはないのだろう。ただ不明なままに残つてしまう疑問は、魯庵のいう「堅く信ずる処があつて」がどのような内実のものなのか、ということである。先の例でいえば、主人公の部屋の狭さを表す比喩表現が欠落したままで放置されたのは(単なる見落としてなく、ロシア語原文中の比喩表現の存在に気がついていたとした場合)、どのような「信ずる処が」あつたからなのだろうか。

高橋の次の指摘に移ろう。「竈前を通り過ぎ」という魯庵の初訳に対して、通りすぎりに竈が見えるだけだ、と高橋が指摘する次の箇所は Moser 訳では「wenn er zur Straße hintersties, mußte er an der Küche desselben vorüber」(E、三) (彼は街路に降りて行く時は、主婦の台所のわきを通りすぎねばならなかつた)となつており、「竈」の語はもともと書かれていない。台所のそばを通る際に中の竈が見えるかも知れない、と高橋は言っているだけであり、「竈が見える」と訳すべきだと言っているわけではない。魯庵の方は、Whishaw 訳が「pass under the fire」(五)となつてゐるためであらう、「竈」に固執し、新訳でも変更していない。ロシア語原文、Garnett 訳にはいずれも「台所」(кухня, kitchen) が出てくるだけで、「竈」に相当する語は出てこない。高橋の細かい吟味の最後は、二段落目の後半の「骨身にしみる(中略)怖ろしいのだ」と三段落目の「斯くばかり(中略)罹つたからだ」の関係についてである。高橋は次のように述べる。

此相つづける二文章は矛盾す、一は宿料の停滞があるから懼れると云ひ、一は鬱憂病に罹つたから斯の如くだといふ、是れ豈矛盾にあらざるや、況んや其直ぐ下に「単り此家の（中略）いやでたまらぬ」とあることや、其実彼の「といふは宿料」云々は例の「前後の取捨にして」西文に無き所なり、是の如き「取捨」は余りに好ましき者にあらず、（A、三五〇）

一読して高橋の主張は納得しがたい。初訳は素直に読めば、主人公はまず神経症が高じて主婦だけでなく人間一般を怖がるようになっており、そこに「宿料の停滞」が加わり、主婦に顔を合わせるのが一層苦痛になっているのだと、きわめて論理的に理解できるからだ。高橋が依拠した Moser 訳を見ると、当該箇所引用は省略するが、驚くべきことに「宿料の停滞」についての言及が欠落しており、その結果、主人公が主婦を怖がる理由が神経症だけに限定されてしまっている。「余は原書を我が書齋に有せず、残念千万」と高橋が慨嘆するのももつともである、というところであらうか。この箇所は新訳での改変は細部の表現にとどまり、当然のことながら高橋の指摘は無視されている。

以上、何語によつてであれ、重訳はいかに危ういものであるか、ということを確認するような議論になつてしまつたが、それはともかく、高橋の書評中の具体的な指摘は、冒頭部分に限るとはいえ、それが魯庵に納得のできるものであれば、改訳作業に一定の影響を与えたと見なすことができるだろう。しかしそれはどちらかというところ、それほど重要でないような短い語句の表現の改良に

限られている。新訳でも Whishaw 訳に基づいたため、Whishaw 訳が不正確な箇所は、高橋の指摘にもかかわらず、Whishaw 訳の不備をそのまま踏襲してしまうことになつたが、この場合は皮肉なことに、やや重大な誤訳が放置される結果となつたのである。

ここで、高橋の批判に対して、初訳を弁護している十八公子の書評（「城南評論」一一号、明治二六年一月）を見てみたい。十八公子はまず「先生（高橋五郎を指す——西野）は不知庵主人が英訳より重訳せし事を知り玉ひながら、何故にこれを独逸訳に比較し玉ひしぞ。独逸訳とて十分に誤謬を免かれ得たるものにあらずとぞ聞く」と述べた上で、魯庵の訳文が底本の Whishaw 訳からどの程度かけ離れているかを検証し、高橋が疑問を呈した「ペレウーロク」の文字の追加については、「横町」だけでは「十分ならざるが為に」妥当であるとし、また「五階造の家」の一節の文中での位置については、Whishaw 訳では魯庵訳と同じであると見て魯庵を弁護している。さらに「突進して」「狐疑逡巡の体で」「のっそり」はそれぞれ「emerged」「with an air of indecision」「slowly」であり、「共に少しく語勢の強過るかと思はるゝ嫌なきにあらねどもいまだ以て不妥当となすべからず」と判定している。そしてまた「骨身にしみて……」以下も（中略）われは毫も矛盾なるよしを見出す能はず」とも述べているが（A、三八六〜三八七）、これは本稿で先に示した見解と一致している。

さて魯庵の初訳が大変な反響を呼んだことを象徴しているのは、高橋五郎の批判に対する十八公子の弁護に対してさらに南海散史（北川貞行）が参戦している点である（「裏錦」明治二五年一二月、

明治二六年一月、二月。A、三七一―三七九)。散史は「露西亜の原書は、幸に我が書齋に之を有する」として、ロシア語原文と照合しながら、高橋と十八公子の意見の食い違いを裁定する。散史によれば、高橋が批判し、十八公子が英訳に忠実であるとして弁護した「五階造の家」の一節の位置は、英訳ではロシア語原文とは違つており、英訳が「妥当の訳と曰ふべからざるなり」であり、同様に高橋が批判し、十八公子が弁護した「ペレウーロク」については、やはり蛇足であるという。そして、「番人」に「ゾウォルニク」(初訳原文では「ドボールニク」、「是は血だ」に「エト、クローイ」(初訳原文では Eto Krov) というぐあい)、魯庵がロシア語のカタカナ音訳とローマ字音訳を付け加えているのは(ただし魯庵は、後者の後には「血だ」と解すべく「血の故だ」即ち「逆上せてゐるんだ」とも解すべし此両義に通ずる故にラスコーリニコフは聞き誤つたのだ」という説明を加えている)、「近頃露西亜の風、我国に吹き来りて、公開演説にも、往々弁士の露語を使用する者あり。一体露語は、邦人の為に耳新しく聞ゆるを以て、訳者は、爰に文学界にも、一種の露語風を吹かさんとて、斯くは露語を挿入したるにはあらざる乎」と推測している。先に見たような高橋の指摘および南海散史のこうした意見があいまって影響を及ぼしたのであるか、新訳では上記の三つのロシア語音訳のうち、「Eto Krov」以外は削除されている。

南海散史はこの他にも、主人公の墓の比喩がロシア語原文では「墓」ではなく「戸棚」になっていることを明らかにし、また魯庵が「露語に通曉せる者により、原作に照して」いない箇所をい

くつか指摘し、「不知庵主人の為に惜む」と慨嘆しているが、これらについては紙幅の関係で省略したい。

初訳に対する書評で最後に見ておきたいのは森田思軒のものである(「国会新聞」明治二五年二月一日)。思軒もまた高橋同様、魯庵の訳本の重要性を認めることにはやぶさかではなく、「斯の訳本が費心労思の極に成り(中略)訳世界に著るしく麗はしき効果を作せるを確認して疑はざるなり」として、この深刻な訳本が外国小説の今後の邦訳に対して及ぼす影響の大きさを強調し、全体として口を極めて称賛している。その中で疑問点としては、冒頭しばらくして、町中に出た主人公の様子が語られる箇所「我が主人公の<sup>(マ)</sup>呀えた顔色は忽ち苦々しき嫌悪の<sup>(イ)</sup>印象を露はした(中略)昏迷に陥つてゐると云ふより、恰で心が麻痺れてゐる様に」(A、一一)(Whishaw 訳では「Our hero's refined features betrayed, for a moment, an impression of bitter disgust (中略) he sank into a deep reverie, or rather into a sort of mental torpor」)(C、六)を取り上げ、「Impression」を訳して却象とし Reverie を訳して昏迷とす固より当らざるに非ず多くの時と処とに於いては実に動かすべからざるの訳たるべし然れども斯の時と処とに於ては之を印象と云ふは寧ろ之を相若くは模様若しくは色と云ふの穏やかなるに如かざるに似たり之を昏迷と云ふは寧ろ之を物思ひ若くは物案じ若くは考込むと云ふの穏やかなるに如かざるに似たり」と指摘している(A、三五八―三五九)。この箇所は新訳では、前半は「見る／＼苦り切つた嫌悪の相に變つて了つた」であり、つまり「印象」(ロシア語原文は「чуждство」)(F、

六)。ロシア語からの初めての直接訳である大正三年一〇月発行の中村白葉訳（新潮社）では「感情」。同書四頁）は「相」に改変され、思軒の指摘に沿った形で改変されたように見える。一方、後半は新訳では「深い冥想」といふよりは精神的の昏酔に沈湎して「了つて」（この部分はロシア語原文では「ОН ПЛАЛ КАК ОН В ГЛУБОКУЮ ЗАДУМЧИВОСТЬ, ДАЖЕ, ВЕРНЕЕ СКАЗАТЬ, КАК ОН В КАКОЕ-ТО ЗАБЫТЬЕ.」(F、六)、白葉訳では「彼は深い瞑想、といふよりは寧ろ、ある種の昏睡に堕ちて」(同上書四〇五頁)であり、的確な訳語を決定しにくい繊細な箇所ではある。そのことは、原作者ドストエフスキ自身「КАК ОН」(言わば…のようなもの)という表現を重ねて使っており、この時の主人公の状態が一言で端的には言い表しにくい微妙なものであるのを示唆していることでもわかる)であり、つまり「昏酔」は「深い冥想」に改変されているが、思軒の薦める「物思ひ」「物案じ」「考込む」はいずれも選ばれず、またその後の「心が麻痺れて」は「昏酔に沈湎して」に改変されている。「昏酔」と「昏酔」の違いはあるが、主人公の沈思が思軒の薦める三様の訳語では表現し尽くせないほどあくまで深いものであったのだという点に魯庵がこだわっているのが感じられる。

思軒の以上の指摘もまた、この時代に、韻文ならいざ知らず、長編小説の翻訳に対して、細かい訳語の弁別にこれほどまで敏感な読者がいたことを示しているようで、驚きを禁じえない。そうした弁別作業に興味をそそらせるほどに、日本の読者にとってドストエフスキイのこの作品の細部の迫力は大きいものだったので

あろう。

### 三、その他の特徴的な改変箇所

ここでは、初訳の書評で触れられていない箇所に対する改訳についていくつか列挙しておきたい。まず『卷之一』についてであるが、「テイツリヤールヌイ、ソベットニク」(九等属?) (A、二二)、「クワルターリヌイ、ナジラーテリ」(警部補?) (A、二二〇)、「コレージスキイ、アッセツソル」(八等属?) (A、一二二)というぐあいには、職業上の位階の訳語に確信が持てなかつたためか、初訳においてロシア語原文の音訳と「？」を併記した箇所は、新訳では「？」、または音訳と「？」の両方を削除しており、新訳の段階において初訳の妥当性が確認されたことを示している。ただし、二番目の訳としては「警察分署長」ぐらいが適当であろう。

初訳「彼ハは下宿から此端までの正確な距離を弁知した、——即ち七百三十歩である」(A、一二二)、新訳「下宿から此の町尻までの厳密な距離がキツチリ七百三十歩なのを青年は能く知つてゐた」(B、六)は、主人公は犯行の実行を空想しながらそれまで何度もその道を歩き、歩数を記憶していた、という意味の記述が直後にあるので、「知つてゐた」と大過去的な訳し方をしている新訳が適切である。これは改善された例である。

質屋の下見を終えて通りに出たところで、初訳「失敬！ 畜生！ 寧ろそやつつけやうか……一ト思ひに」(A、一八)とあるのは誤訳であり、新訳「何も彼も沙汰の限り、醜極まつてる！ 俺に出来

るか、出来る意か？」(B、一五)の方が意味が正しく伝わる。

居酒屋で聞こえる歌の歌詞が初訳では *Whishaw* 訳の英文がそのまま書き写されている(A、一九)が、新訳では日本語に訳出されている(B、一七)。舞台はロシアであるので、英訳をそのまま載せるのは場違いであり、改変は当然の処置であろう。

マルメラードフの科白で、初訳「僕の家内がレベジャツトニコフに打たれました」(A、二三)は、新訳では「下拙てまへの愚妻がレベジャツトニコフで奴に殴られました」(B、二二)というように「て奴」が加えられている。話相手にとって「レベジャツトニコフ」は初めて聞く名前なのだから、この場合「て奴」という表現がある方が自然であろう。注意深い改変がなされた例である(もつとも、酔っ払いの前後を弁えない唐突で舌足らずな話し方という設定であるならば、「て奴」が欠けていてもさほど不自然ではない、という考え方もできる)。

高等教育を受けていないソーニヤが生理学の本を熱心に読んでいたことをマルメラードフが述べる箇所、初訳「高声かうしやうに僕たちに読んで呉れました」(A、二九)が、新訳では「大きな声で読んでいました」(B、三二)に改変され、ロシア語原文と *Whishaw* 訳に付いている「僕たちに」の部分なぜか削除されている。ここは学問上の有用な知識を家族と共有したいというソーニヤの家族思いの性質の一面が現れた箇所なので、新訳は改悪になってしまっている。

続く場面でソーニヤが「How could I do that?」(C、一九)とカチエリーナに問いただすのを初訳では「何うすりやア好いで

す」(A、二九)と訳し、新訳でも大きな改変はないが、「that」は売春を指しているのは明らかなので「どうしてあんなことができるでしょう？」という意味に訳すべきである。これは、初訳の不備が新訳でも改善されていない例である。

さらに続く叙述で、最初の「仕事」から帰宅したソーニヤの「I laid thirty roubles in silver upon the table」(C、二〇)という動作が初訳では、「卓子に銀貨で三十「ルーブル」を」「投付け」(A、三〇)と訳されているが、新訳では「ザラ／＼と列なべ」(B、三五)と改変されている。初訳の「投付け」は、最初の「仕事」の衝撃のため、いかにソーニヤでもふるまいが粗雑になってしまったという理解から出た訳語であると考えられるが、新訳は、ソーニヤのあくまでおとなしい性質(ロシア語 *тихая* 「静かな、おとなしい」はソーニヤの性質を言い表す言葉として主人公によって繰り返し口にされる)が確認された上でなされた改変であると考えられる。

主人公がマルメラードフを家まで送って行った帰り道に、一線を踏み越えたソーニヤに思いを馳せる場面で、初訳では『人間実にくだらぬ者もんで何事にも忽ち慣れツちまうもんだ』と呟いた後で、『自己おれの考慮かんがへが間違ツてなけりやア——若し自己の思ふ通り人間がくだらなくなけりやア己が路に横はる恐ろしき事、忌むべき事に出遇ふたんに、人は蹂躪ふみにじツてしまふはずだ』(A、四二)と自分の考え方を反省しているが、『自己の考慮が間違ツてなけりやア』と否定文になっているため、前後の辻褄が合わない。正しくは『自己の考慮が間違つていれば』(「If I am wrong」)(C、二八)

と肯定文に訳すべきところであるが、新訳でも訂正されていない。単なる不注意による誤訳であるとか考えようがないが、主人公が犯行に踏み切るに至る思考の流れの一つの重要なポイントをなしている一節でもあり、読者は文脈が理解できず困惑したであろうと思われる。

警察署において、主人公が散歩の時刻を簡潔に答えた後の警官の科白、「Concise and clear」(C、九二)は、「(答え方は)簡潔にして明瞭だ」いうように訳すべきであろうが、初訳は『明了と詳しく』(A、一二〇)、新訳は「最つと明瞭に判然と」(B、二〇九)となっており、いずれも「もつと詳しく話すように」と要求しているように響く。これは改変はなされたものの、改善には至っていない例である。

以上は『巻之一』であるが、続いて『巻之二』についても見ておく。ラズミーヒンがドウーニヤに言う科白、「how terribly like your brother you are —— in almost every respect」(C、一六九)を初訳は「貴嬢の兄さんの様な何事にも怖い人はありませんよ」(A、二五四)と訳している。これはむしろ、新訳「貴嬢は兄さんにそっくりだ。細かい点までが一々能く肖てゐます」(B、三九六)が正しい。

主人公が母親からの送金をマルメラードフの葬式費用に供したことを説明する箇所、『人を救けるにハ救ける権利を有つてゐにやアならん』(中略) 渠は言葉鋭くとげ／＼しく言収めた」(A、二六九)の一〇行は、Whishaw 訳では欠けているが、初訳、新訳において補足されている。

続く場面に、一時的に語り手の視点が部屋に残った主人公から離れ、外に出た母親と妹の会話が二頁あまり記述された後(A、二八七～二九〇)、語り手の視点が再び主人公のもとに戻ってくる箇所がある。Whishaw 訳では、母親と娘のこの会話はさほど重要でないと思なされたのであろう、省略されているが、初訳、新訳とも補足されている。

主人公とラズミーヒンがポルフィーリーを初めて訪れる途上の、『また空滑稽けて彼奴を嚇してやらう(中略)是だから困る!…』(A、二九七)の五行は、英訳では欠落しているが、初訳、新訳ともに補足されている。

主人公が死んだリザヴェータとソーニヤの共通の性質に思いを馳せ、いずれも運命に従順で「不憫な、温和しい」人間であると考える場面で、「……む、あの女は自己の様な者でなけりやアなるまい」(A、三三九)、「此女には俺のやうなもんでなけりやならん」(B、五二七)と心の中で思うが、この部分はロシア語原文、Whishaw 訳のいずれにも見当たらない。「あの女」はソーニヤを指すと考えられるが、魯庵が主人公とソーニヤがいざれ結びつくことを、先回りして、いわば読者へのサービスとして、勝手に挿入したのであろうか。

さて最後に、木村毅が「雷石に打たれたような気がして千万無量の深淵な意味がこめられているように思えてならなかつた」(注七)と述懐している、下宿でころころしている主人公がナスタシーヤに何をしていると問われて答える科白「考へる事!」(A、四五)に触れておく。島崎藤村『春』(『東京朝日新聞』明治四一年

四月七日（八月一九日）の中で北村透谷をモデルとする青木が、夫人に無為をたしなめられた際に『内田さんが訳した「罪と罰」の中にもあるよ、銭取りにも出かけないで一体何をして居る、と下宿屋の婢に聞かれた時、考へることをして居る、とあの主人公が言ふところが有る。ああいふ事を既に言つて居る人があるかと思ふと驚くよ。考へる事をしてゐる——丁度俺のはあれなんだね』と答えている。木村が感銘を受けたのは、ここに引用された「考へる事をしてゐる」という訳文である（魯庵訳では「考へる事！」とだけ書かれてゐる）。ナスターシャと主人公のこの問答は *Whishaw* 訳では「What sort of work?」「Thinking,」（C、二一九）あるが、新訳では「考へる事さ」（B、六二）という常套的な日本語に改変されており、「考へる事」という詰屈な言葉が放つインパクトは消えている。小説中の文章では、一見生硬に見える日本語がきらりと光る場合があるという好例であろう。なお、Garnett 訳では「このやりとりは」「What sort of work?」「I am thinking,」（D、二二七）となっており、木村は *Whishaw* 訳の「Thinking,」は、魯庵が「考へる事」という名詞の目的格に訳出する上で好都合な英訳であったとして、魯庵訳の誕生の一因を *Whishaw* 訳に帰しているようであるが、同じ名詞の目的格ではあつても、「考へる事」には「考へる事」にはない不思議な魅力が具わっているのである。

ごく一部の特徴的な箇所にはすぎない。なお、魯庵訳の章立てについて付言しておく。*Whishaw* 訳の章立て Part 1 : Chapter 1 ~ 7 (pp.5~80) / Part 2 : Chapter 1 ~ 7 (pp.81~151) / Part 3 : Chapter 1 ~ 6 (pp.152~225) は、ロシア語原文の章立てに即したものであるが、初訳では、Part の区切りを取り払って、Part 1 Chapter 1 から Part 2 Chapter 3 までの計 10 Chapters を第一回、第十回（以上『巻之二』）/ Part 2 Chapter 4 から Part 3 Chapter 6 までの計 10 Chapters を第十一回、第二十回（以上『巻之二』）としている。新訳では、第一編を第一回、第七回、第二編を第一回、第七回、第三編を第一回、第六回とし、ロシア語原文および底本の英訳と同じ構成に改変している。これは、原典に忠実となるよう改変した例である。

まとめ

以上のように、初訳と新訳を比較してみると、初訳の誤訳が新訳でも放置されていたり、新訳の方がかえって改悪になっている箇所もあるが、全体としては新訳の方が誤訳が少なくなっており、読みやすい日本語になっていると言えよう。そうした改善を促す機縁となったのは、魯庵も認めるように、当時の書評に見られる忌憚のない訳文批判であった。

両訳に存在する誤訳は、二葉亭の助力があつたにもかかわらず、底本の *Whishaw* 訳の誤訳をそのまま引きずってしまった箇所と、魯庵の単純な誤読に大別できる。ロシア語原文に *Whishaw* 訳より忠実である Garnett 訳が新訳時に出版されていれば、新訳の誤

訳はもつと減っていたことは疑いない。

先にあげたソーニヤの行動の描写の箇所で見たとように、訳し方いかんで人物の性質に対する読者の解釈が左右される場合がある。「罪と罰」のような影響力の大きな作品の場合、登場人物の行動や科白が読者に記憶され、他の作家が人物を造形する上で参考とした例が少なくなかったことを思えば、大正三年以降の中村白葉などの後続の邦訳が読者に浸透するまでは、魯庵の文学史上の責任は重大であつたとも言える。ともあれ、文学作品は新しい訳本ほど誤訳箇所が修正されて減少していくのが一般的傾向であり、魯庵の新訳への取り組みは、後世のそうした継続的努力の必要性を身をもって訴えたという意味でも記憶されるべきものである。

(注1) 『罪と罰』を読める最初の感銘、「新潮」明治四五年七月。『内田魯庵全集』第三卷、ゆまに書房、昭和五八年一〇月、一七七頁。

(注2) 同、一九〇〇一九五頁。

(注3) 同、第一二卷、昭和五九年四月、七頁。

(注4) 同、三九〇頁。

(注5) 「比較文学年誌」(二四号、一九八八年)の別冊、七頁。

(注6) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第三卷、昭和女子大学研究所、昭和四九年三月、二四九頁。

(注7) 「解題」、『明治翻訳文学集』筑摩書房、一九七二年一〇月、四〇四頁。

(本稿は二〇〇八年七月五日の日本比較文学会創立六〇周年記念九州大会(九州大学)におけるシンポジウム「文学の翻訳をめぐって」の発表原稿に加筆訂正を施したものである)